

## J-F・リオタールの『判断力批判』読解に関する一考察 ——「崇高の分析論」の Zusammenfassung について——

浅野雄大

### はじめに

J-F・リオタール(1924-1998)は、1980年代を中心として「崇高」という美学的タームに着目し、従来芸術の理論を基礎づけてきた美の美学の超克と、前衛芸術の擁護を試みていた。このことはカント『判断力批判』(以下、『第三批判』)の綿密な研究に基づいている。本論文では、リオタールのカント『第三批判』に関する講義録『崇高の分析論講義』を中心に、彼の『第三批判』「崇高の分析論」(以下、「崇高論」)読解を主題とする。

ところで、『第三批判』における「崇高」とは、不快と快の二つの契機が入り混じった感情であり、前者は構想力の反目的性に、後者は理性の合目的性にかかわる。リオタールの読解の特異性はこれらのうち、前者を強調して読むところにある。本論文では、それに関連する彼のカント読解の内容を検討する。彼が反目的性を強調するのは、構想力の「総括[Zusammenfassung]」という働きにカント哲学の「主体」が崩壊する契機を見出すからである。

よって本論文の目的は、リオタールのカント読解の位置付けと擁護を行うことである。そのために次の手順を踏む。まず先行のカント研究を参照し、彼の読解の相対化を行う。争点は「総括」が『純粹理性批判』(以下、『第一批判』)における総合にどのように位置付けられるかである。最後にリオタールの読解の意義を考察する。彼の読解は「崇高論」の総合の問題を『第一批判』の認識論的問題と結びつけ、前者の意義を明らかにするものであり、これによって彼はポストモダンにおいて「崇高な芸術」が要請される理論的根拠を得たのである。

## 1. 「崇高の分析論」における「把捉」と「総括」

### 1.1 「崇高の分析論」における構想力の二つの働き「把捉」と「総括」概念の導入

では、「崇高なものの判断」において、カントは構想力の働きについてどのように説明しているのだろうか。その中心となる概念が、「把捉 [Auffassung]」と「総括 [Zusammenfassung]」である<sup>(1)</sup>。それが論じられているのは、数学的に崇高なものについて論じた箇所の一つ、第二六節である。

#### 引用 1

ある量を尺度として、つまり数による量評価の単位として用いようべく、直観的にある量を構想力のなかに受け入れるためには、この能力の二つの働きが必要である。つまり把捉 [Auffassung] (覚知 [apprehensio]) と総括 [Zusammenfassung] (美的総括 [comprehensio aesthetica]) が必要である。把捉をもっては構想力はなんら困難はない。なぜならそこでは構想力は無限に進みうるからである。対して総括は、把捉が先に進むにつれていっそう困難になり、すぐにその極大に、すなわち美的に最大の根本尺度に達する。なぜなら、把捉が、感官直観の最初に把捉された部分表象が構想力において消え始めるくらい進むが、一方で構想力がよりいっそう把捉に進む場合、構想力は、他の側面で獲得するのと同じくらい、もう一方の側面では喪失し、そうして総括においては構想力が越えて進むことのできないある最大量があるからである。<sup>(2)</sup>

ここで「把捉」と「総括」という構想力の二つの働きが導入され、前者は無限に進むことができるが、後者はどんどんと困難になっていき、「極大」へと達してしまうことが示される。カントはこのようにして美的量評価における最大量、つまり構想力の能力の限界を定めることで、それと「絶対的全体」という理性理念との不一致を論じ、崇高なものの判断における「不快」が生ずる契機を描こうとしている。このように美的「総括」は崇高なものの判断における反目的的契機を担っている。

## 1.2 「覚知の総合」と「再生の総合」に対応する概念としての「把捉」と「総括」

以上のようにして示された「把捉」と「総括」概念は、たびたび『第一批判』第一版の「演繹論」（以下「第一版演繹論」）の議論と結びつけて考えられてきた。

例えばP・クラウザーは、「把捉」「総括」の概念が「第一版演繹論」の「三重の総合」<sup>(3)</sup>の初めの二つに対応していると指摘している。「三重の総合」とは経験的認識を可能にする三つの総合、「直観における覚知の総合 [Synthesis der Apprehension in der Anschauung]」・「構想作用における再生の総合 [Synthesis der Reproduktion in der Einbildung]」・「概念における再認の総合 [Synthesis der Rekognition im Begriffe]」を指す。「覚知の総合」とは感官によって受け取られた渾然とした「多様なもの」を悟性が総合すべく、まずは直観において「通覧 [Durchlaufen]」し、ひとまず「収集する [Zusammennehmung]」という二つの契機を含む働きである<sup>(4)</sup>。次に「再生の総合」とは、「たびたび継起あるいは随伴してきた諸表象がついに相互に連合し、それによって一つの結合のうちに置かれ、その後では、対象が現存していなくとも、恒常的な規則に従って、これらの表象の一つから他の表象へと心を移行させる<sup>(5)</sup>」ようにする働きのことである。これは、覚知の総合において取りまとめられた多様な表象を「相互に連合」することによって、いわば保持し、表象を全体として総合できるようにする働きである。順番に捉える表象が次々に忘れられてしまえば、経験的認識は生じ得ない。その認識を保証しているのが「再生の総合」であると言える。そして、このようにして行われた表象の系列における再生を概念において有意味たらしめるための、「私たちが思考しているものが一瞬前に思考したものとまったく同一であるという意識」である「再認の総合」が続く次第である<sup>(6)</sup>。このようにしてクラウザーは「把捉」が「覚知の総合」に、「総括」が「再生の総合」に対応していると主張するのである<sup>(7)</sup>。

クラウザーのように「把捉」と「総括」を「第一版演繹論」における総合に対応したものと考える読解は、次のようにまとめられるだろう。つまり、「覚知の総合」＝「把捉」および「再生の総合」＝「総括」は、「第一版演繹論」においては悟性の「概念による再認の総合」に向けられていた。しかし、「再生の総合」＝「総括」には限界があるということが「崇高論」において初めて明らかにされ、それが限界に達することで、限定的な「いくらかの全体性 [any whole]」という悟性概念からは解放され、「絶

対的全体性」という理性理念に結びつくことになる。

以上に述べたような「崇高論」における構想力の働きの解釈に対して、次節ではリオタールによる読解を導入する。彼は以上の二つの働きを独自に解釈している。

## 2. リオタール『崇高の分析論講義』における「把捉」と「総括」読解

リオタールによる「崇高論」の読解上の立場を検討する前に、議論を明瞭にするために上記のクラウザー説との差異を明確にしておく。彼は、以上の研究のように「把捉」と「総括」を「覚知の総合」と「再生の総合」にそれぞれ対応させるのではなく、前者のみが「覚知の総合」と「再生の総合」に対応し、後者は「崇高論」に特有の働きであるとするのだ<sup>(8)</sup>。

「崇高論」における「把捉」が「第一版演繹論」における「覚知の総合」と「再生の総合」に対応しているという彼の解釈はどのようにして可能なのだろうか。この問いには次の二点をもって答えられる。リオタールはまず、①「崇高論」における「把捉」を『第一批判』「原則の分析論」における「合成」と結びつけ、そして②その「合成」は「第一版演繹論」の「覚知の総合」と「再生の総合」の両方を要求することを証明する。

### 2.1 リオタールの読解① —— 「把捉」と「合成」の結合

「崇高論」において「合成」は、次のように記述されている。

#### 引用 2

構想力は、量表象に必要な合成 [Zusammensetzung] において、なにかに妨げられることなく無限に進む。悟性は数概念を通してこれを導くのであり、そのためには構想力が図式を提供しなくてはならない。<sup>(9)</sup>

ここは、いかにして論理的量評価が無限に進むのかが論じられている § 26 の一部分である。構想力は、「合成」において「なにかに妨げられることなく無限に進む」。こ

のことから、この〔引用2〕は〔引用1〕において主題化された二つの構想力の働きのうち、「把捉」を説明した物であると言える。合成は悟性が量を表象するために「数概念を通して」無限に進行する。

ここでカントは『第一批判』の議論を引き継いでいる。『第一批判』において「合成」は、「原則の分析論」において「必然的に相互が属しあっていない多様なものの総合」であり、「数学的に考究されるすべてのものにおける同質的なものの総合」と説明される<sup>(10)</sup>。例えば、二つの三角形は、お互いが必然的に結びつくことはない二つの要素であるが、これらを合わせて四角形とするためには、二つを同質的なものとして結合する必要がある<sup>(11)</sup>。この結合が「合成」である。リオタールはこの「合成」と「把捉」が密接に関連した概念であることを指摘するために、この「合成」の定義のすぐ後に続く「直観の公理」の証明における記述を引いて、根拠を示す。以下はカントのテキストを引用。

### 引用3

現象が覚知〔把捉〕される〔apprehendieren〕のは、つまり現象が経験的意識のうちに取り入れられるのは、一定の空間あるいは時間の表象を産出する多様なものの総合を通して以外ではあり得ない。つまり同質的なものの合成と、そうした多様なもの（同質的なもの）が総合的に統一されている意識を通じて以外ではあり得ない。<sup>(12)</sup>

ここは、「直観の公理」の証明の前提が提示されている段で、この後に「多様なものが総合的に統一されている意識」が「量の概念」によって構成されることが示されようとしている文脈である。この記述は、直観を可能にする「現象の覚知」そのものを特徴づけている。つまり、それは、空間と時間一般の規定を可能とする総合と同一の総合を通して行われなくてはならず、空間と時間の表象を産出する多様なものは、それが多様なままでは総合されることはできず、「合成」を通して総合される。ここから、リオタールはカントが想定する「把捉」が「合成なしには生じ得ず、さらには、少なくとも現象の量に関するかぎりでは、把捉とは合成」<sup>(13)</sup>であると結論づける。この

ようにリオタールは「把握」と「合成」という概念が密接に関わっており、少なくとも後者が前者の条件であると考察している。

## 2.2 リオタールの読解② —— 「把握 / 合成」と「第一版演繹論」の「三重の総合」

リオタールは「把握」と「合成」を強く結びつける読解によって、それらを「第一版演繹論」における「三重の総合」に位置づける。彼によると、「合成」およびそれに密接に関わる「把握」が行われるためには、「第一版演繹論」における「覚知の総合」および、「再生の総合」が必要とされるという。

まずは、いまや「合成」と結びつけられた「把握」がいかに「覚知の総合」と結び付けられるかだ。「覚知の総合」は多様なものを「通覧」し、そして「収集」する働きであった。リオタールはその「継起性」と「同時性」という二つの側面に着目し、それを「合成」と結びつける。彼によれば時間的継起性を構成するために必要なのは、多様な継起を合成によって同時的に結合することである。つまり「多様なものの流れ」を移行として捉えるには、「同時性」が必要となる。「通覧」において継起的に流れる多様なもの（「流れゆくもの」）を一瞥し、「収集」においてその多様なものを同時的に（「流れないもの」）することで、はじめて多様なものを前後あるものとして、つまり継起的に流れるものとして総合することができる。このように、リオタールは同質的なものの数学的な総合である「合成」が行われるためには、「収集」が必要であると主張するのである。なぜなら、「収集」は継起的な多様を同質的なまとまりにし、かつ同時的なものとすることで、「単位」を生み出すことができるからである<sup>(14)</sup>。

続けて、「把握 / 合成」は「再生の総合」とどのように結びついているだろうか。「再生の総合」は、継起的に収集された諸表象が相互に連合し、結合させる働きであり、その後では、対象が目の前になくとも表象を継起に従って順番に捉えることを可能にするものであった。リオタールによれば、これがなければ、「現象の量を形成するための継起がなくなる」ことになり、「合成」が成立しなくなってしまうという<sup>(15)</sup>。例えば二つの三角形を正方形に合成するためには、その二つの三角形を保持しなくてはならない。よって、「合成 / 把握」が成立するためには「再生の総合」も行われなくてはならないのである。

ここまですまよう。「把捉」の条件には「合成」が含まれる。そして、「合成」は「覚知の総合」と「再生の総合」を要請する。リオタールは「把捉」と「合成」の以上のような関係を明らかにし、「合成」がその条件に含まれる「把捉」が「第一版演繹論」における「覚知の総合」と「再生の総合」に対応していることを主張するのである。

### 2.3 リオタールの読解③ —— 「総括」と「背進」

では、リオタールは「崇高論」[引用1]において「把捉」と並べて考察されていた「総括」をどのように捉えるのだろうか。それを考察するためには、次のカントの記述を参照せねばならない。

#### 引用4

ある空間を（把捉として）測定することは、同時にそれを描くことであり、したがって構想力における客観的運動であり、また前進 [Progressus] である。それに対して多を思考の単位 [Einheit] ではなく、直観の単位において総括することは、したがって継起的に - 把捉されたものをある瞬間のうちに総括することは、背進 [Regressus] であり、これは構想力の前進における時間条件を再び廃棄し、そして同時存在を直観的にする。従って総括は、（時間継起は内官と直観の条件であるから）構想力の主観的運動であり、これを通じて総括は内官に暴力 [Gewalt] を加えるが、この暴力は構想力が直観において総括する量が多いほど、顕著になる。<sup>(16)</sup>

ここでは、カントは「把捉」を「前進」、「総括」を「背進」と特徴づけたうえで、「背進」は「前進における時間条件」を「再び廃棄」と語っている。ここでいう「総括」は『第一批判』における「第一版演繹論」の「三重の総合」から逃れるものなのだろうか。

リオタールの解釈は、この「総括」が「三重の総合」から部分的に逃れ、そして主観において「我思う」を構成する時間的総合から逃れるというものだ。彼によると、「背進」とは、「構想力にとって最も本質的なもの」に「害を及ぼす」という。それは「時間条件」であり、「第一版演繹論」における三重の総合によって正当化されるものであっ

た。このようにリオタールは第二七節の「時間条件」を「第一版演繹論」「再生の総合」と結びつける。把握は、時間の総合と同じものであり、それは「再生の総合」によって保証されているという彼の読解は先に確認した通りである。すなわち、総括における「時間条件の廃棄」とは、そういった「把握」における「時間継起」を不可能にするということを意味し、またそれは「内官の条件」でもあるために、統覚の構成に影響する。この点こそリオタールが「総括」を強調する理由である。このようにして彼は、「崇高」における構想力の「背進」の反目的性を強調することで、主体性の哲学を崩壊させることを目論む。つまり、リオタールにとって、背進する構想力は、「統覚の総合」を、すなわち「我思う」をそれ自体で構成する時間的総合にとって「反目的的」<sup>(17)</sup>であり、ここを強調して読む。このことこそ、彼がポストモダンにおいて要請する「崇高」の芸術において、要請される「美的感情の時間」の理論的根拠となる<sup>(18)</sup>。

### 3. リオタールによる読解の妥当性

ここまで、「崇高論」における「把握」「総括」の両概念について、それらが「第一版演繹論」における「三重の総合」においてどのように位置付けられるかについて、二通りの説が提示された。クラウザーは、「把握」は「覚知の総合」に対応し、「総括」は「再生の総合」に対応すると考えた。それに対してリオタールは「覚知の総合」「再生の総合」はどちらも「把握」に対応し、「総括」を、その二つの総合とは異質な、「崇高論」に特有の構想力の働きであると考えた。

この二通りの解釈の分岐点を明らかにしよう。総括が「再生の総合」であるとする根拠はなんだろうか。この点に関して、最も説得的と思われる小田部胤久の説明を引いて考察する。彼は「総括」が「再生の総合」に対応するとしただけで、「構想力によってある全体的な表象が把握される際には、常に構想力の「背進」が前提とされる」<sup>(19)</sup>と、「総括」における「背進」の一般性を主張している。小田部の説明によれば、「継起的に把握される多様が一つの像として表象される」ためには「背進」の過程が必要であり、それによって「時間的に過ぎ去ったものも現在のうちに保持され、こうして

さまざまな瞬間において表象されたものが現在のうちに「同時存在」する<sup>(20)</sup>。「背進」による「同時存在」と、それに伴う「時間条件の廃棄」は、むしろ経験的認識を可能にする条件を構成するものなのである。この説明に従うなら、「内官への暴力」は経験的認識全般において常に行われているということになり、それにかかわる構想力の反目的性を「崇高論」において論じる必然性がなくなってしまうことになるのではないか。この点に関して小田部は、崇高なものにおいては「通常は意識の背後に隠れている「背進」の過程——あるいは「背進」が「内官」に与える「威力 [[Gewalt]=暴力]——が前面に現れる<sup>(21)</sup>（強調引用者）」と説明する。つまり「背進の過程」を一般的なものとしつつも、それは通常は隠れており、崇高なもの判断において初めて、「背進」の失敗とともにそれが内官へと及ぼした暴力が「際立つ」ということだ。

しかし、リオタールのように「総括」を「再生の総合」から独立したものとして読めば、崇高なもの判断における「背進」は、経験的認識の条件には関わらないため、小田部が示すような「普段は隠れている「背進」の際立ち」という特別な読解上のタームを導入する必要がない<sup>(22)</sup>。それに加え、リオタールの立場からすれば、小田部がここで「通常の」意識として想定しているのは、無限に進行する「合成」のことである。これは論理的なものであり、美的なものではない。

また、小田部の立場は「総括」が「通常の」総合の過剰の先にあるものだと理解するものであり、そこでは「総括」の経験的認識との連続性は自明であったように思われる。リオタールの説はその連続性を否定しているようにみえる。だが、そういうわけではない。なぜなら「総括」は「把捉」をもとにして成立するからである。すなわち、総括は、無限に続く把捉において「合成」された部分表象の合成体に対して行われるということであり、その意味で「総括」は「把捉」の合成作用から成立しているのである。言い換えるなら、「通常の」認識は、現象を認識するときには常に起こっているが、それに並行して、美的「総括」が「通常の」認識における「合成」から分岐的に発生しているのである。「再生の総合」と「総括」はパラレルに成立しているといえる<sup>(23)</sup>。

## おわりに

本論文ではリオタールの「崇高論」の読解の一部を検討した。彼は「総括」が、経験的認識を可能にする悟性的な総合である「再生の総合」とは並行した別の総合だと考える。なぜならこのことによって「総括」における「背進」に経験的認識にはない特権的な地位を認めることができるからである。そして、このことこそがリオタールが「崇高」に着目する点であり、ポストモダンにおいて崇高な芸術が要請される根拠であるとも言える。つまり、前衛芸術はもはや調和的な「美」ではなく、破綻的な「崇高」に取り組んでいる。そして、それを通して得られるものは時間継起を、さらには自己意識「我思う」の基盤をも崩壊させる経験である、ということだ。

次に問われるべきは、以上のようなリオタールの読解から、なぜ彼が崇高を自然ではなく芸術に結びつけたのかである。この点に関しては別項にて改めて論じることとしたい。

### 註

- (1) Kant, *Kritik der Urteilskraft*, 1790 (以下、KU) V 251-252.
- (2) *ibid.*
- (3) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781 (以下 KRV) , A97.
- (4) *ibid.* A99.
- (5) *ibid.* A100.
- (6) *ibid.* A103.
- (7) Crowther, Paul, *The Kantian Sublime: From Morality to Art*, Oxford Philosophical Monographs, 1989, p. 96.
- (8) 図式化すると以下のようなになる。

《クラウザー等》	《リオタール》
把握 — 覚知の総合	把握 — 覚知の総合 及び 再生の総合
総括 — 再生の総合	総括 — (「第一版演繹論」における対応なし)
- (9) KU, V253-254.

この引用箇所は、アカデミー版の校閲者であるエルトマンが‘Zusammensetzung’を

‘Zusammenfassung’ と校閲してしまって以降、「総括」と「合成」が混同して読解されてきた箇所である。リオタールはここを校閲前の ‘Zusammensetzung’ でとる。

- (10) KRV, B202.
- (11) *ibid.*
- (12) KRV, B202-203.
- (13) *Leçon sur l'Analytique du sublime*, Galiée, 1991 (以下、LAS), p. 133. また、日本語版として『崇高の分析論 カント『判断力批判』についての講義録』星野太訳、法政大学出版局、2020年、152頁 (以下、本書を引用するときはカッコ内にて和訳の頁数を示す)。
- (14) LAS, pp. 133-134. (152-153 頁)
- (15) *ibid.*, p. 134. (153 頁)
- (16) KU, V258-259.
- (17) LAS, p. 177. (204 頁)
- (18) *ibid.* (205 頁)
- (19) 小田部胤久「Auffassung/Zusammenfassung/Darstellung ——カント『判断力批判』における「構想力」について」、『美学芸術学研究 (32)』、2013、129 頁。
- (20) 前掲書。
- (21) 前掲書、130 頁。小田部が「威力」と言っている語は、Gewalt の訳語であり、本論文では「暴力」と訳している。
- (22) 永守伸年は、リオタールと同じように、「総括」を「三重の総合」から独立したものと読む。永守は「崇高論」の構想力の「総括」作用が「超越論的综合」から独立しているとしたうえで、そういった作用が第二七節において唐突に主張される必然性として、カントが構想力の再生的ではない作用として、「形成能力 [Bildungs-vermögen]」という能力を前批判期から構想していたことを挙げている。永守伸年『カント 未成熟な人間のための思想：想像力の哲学』慶應義塾大学出版会、2019、206-207 頁。
- (23) 以上のような「総括」概念の混乱は、カント自身の用語法の混乱に起因している。なぜなら、カントはまさに「論理的総括」という意味で「総括 [Zusammenfassung]」と書く時もあるからだ (KU, XX220, V253-254)。『第三批判』において度々登場する Zusammenfassung という語は、なんの説明もなくこれら二つの意味で使われることがあり、そのことが混乱を引き起こしてきたのである。